
裏・機動六課～ロングアーチ業務録～

煤払

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

裏・機動六課～ロングアーチ業務録～

【Zコード】

N9418M

【作者名】

煤払

【あらすじ】

聖王教会騎士、アレル・ロックウェルト。

彼が向かうは起動六課。果たして彼はJS事件にどう関わるのか！
といふか見えるところで関わるのか！

裏・機動六課
～ロングアーチ業務録～

ミシードの空に、テイク・オフ！

「んな感じで、俺は仕事に行きました。（前書き）

ノリで。

すみません、いきなり噛んでしまつほど完全にノリで書きました。

この小説のテーマは『シャツハさん』です。

もつと言つと『シャツハ萌』です。

もし煤払が書いた、シャツハさんについて書かれた感想を見た方がいらっしゃつたら、『あ、『イツやつちやつたんだ…』とでも思つて下さい。

ラモンさんの『魔法少女リリカルなのは Strike r S』とある新人の日常』の番外編に書かれたシャツハさんに萌えました。萌えたんです。だから書きました。すなわちヒロインはシャツハさんです。

ラモンさんの小説はとても面白いので、ぜひ一読を！

私はここだ、声を大にして言いたい。

シャツハさんは萌えキャラであると！――！

ジーク・シャツハです。いや失礼、取り乱しました。

そんなこんなで始めたこの小説。煤払のキヤパ次第では、大分更新が遅れるかもしれません。

それでは、シャツハ萌…じゃなかつた、裏・機動六課／ロングアーチ業務録）。お楽しみいただけます。

「こんな感じで、俺は仕事に行きました。

「最近、貴方の羽振りが随分と良くなつていまして。調べてみると貴方宛に”献金”として預けられたものが、教会本部に送られた記録がないのですよ」

田の前の男 聖王教会の騎士の一人に、私は声を掛ける。

「聞けば貴方は、『聖王を現代に蘇らせる』などと触れ回っていたとか。そちらも我々の耳に入つております。よろしければ、お聞かせ願いたいのですが」

禿げ上がつた頭部から弛んだ首まで……と、いけません、言葉遣いが崩れてきました。

まあ、顔中に冷汗をかいてる」これから、大体このあとの処遇は察しているのでしよう。

「わ、私は聖王を蘇らせる！あれは私の同志から受け取つた、その為の資金だ！」

何やら弁解するように言いますが、それを自分で使っちゃ駄目でしょう。理屈が通つていないと気付かないんですかね。呆れてものも言えません。

私の沈黙が先を促していると思ったのか、彼は続けて話し出します。いや、だからただ呆れてただけなんですが。

「私の言つていることは決して戯言などではないぞー私に任せておけば必ず聖王は蘇る！今、私の手には聖王の遺伝子があるのだから

な！」

その言葉に、私は少し、眉を上げる。

聖王。古代ベルカに生きた三人の優れた『王』の一柱にして古の大戦を終幕へと導いた英傑。

その、”遺伝子”がこの男の手に……？

「……”人間”のクローニングは、管理局によつて禁じられているはずですが

「それがなんだというのだ！？ かの『聖王』の再臨だぞ！？ 聖王陛下が今、この時代に復活し、再びこの世界を治めるのだ！ 我々がお育てした！ 我々の聖王が！」

”我々の”聖王。

なるほど、そして現代の聖王の教育役、はては攝政の地位にでも收まり権力を得ると、そういうことですか。

……胸糞悪い話だ。

ああ、胸糞悪い話だよ。

「わかつただろう？ わかつたらすぐ私を解放しろ。そして今回の事も忘れる。そうすれば」

「少し黙れ、おっさん」

「キサマー？」この私に向かつてその口の聞き方はなんだ！ 我々は聖王教会に属する者として聖王を復活させる使命があると、何故わからん！？」

言葉遣いになんて、もう気は配らない。

『「みんなさー、お兄さん。あと、ありがとうございました。』

『「みんなさー、お兄さん。あと、ありがとうございました。』

勝手な都合で作り出され、不要になると簡単に捨てられる、あいつみたいな奴を！

『「関係ねえし、興味もねえな、そんなもん」

『「なんだと！？ キサマ、自分の言つたことを後悔しろ！ ここを出たらすぐにもキサマを除名してやるだー！ 私の力ならキサマのようなウグツ！？』

『「黙れつていつたのが、わからねえか？」

前の質問だけ、覚えてます？今、答えます。

『「カリムか？ 横領……つては言えないかもしけねえが、使ってたのは認めたぞ」

『「認めたって、貴方は何をやつているの！？』

『「騎士アレル、理事から手を詰しなさい！ それにその言葉遣いは直しなさいと何度も！」』

『「カリム、シャツハも、うるせえ。いいから騎士を何人か揃える。そこでこのクソツタレの家やら借りてる金庫やらを徹底的に調べろ！」

僕自身がしたい事。……お兄さんの生まれたところ、見てみたかつた。きれいなところなんですね？

『「一体、どういづ」』

『「聖王の遺伝子」とやらを手に入れたらしい。それを使って聖王を蘇らせる気なんだよ』

『「なんですか！？ それは……』

「マジだ。なんなら会話記録を送る」

『いえ、結構よ。すぐに手配するわ。シャツハ』

『はい、騎士カリム。要請を出して参ります』

だから、ぼくが したら

「ゲ、ゲホッ！キサマ、私の首を絞めるなど……！」

「……少し待つて。次はテメエの手に縛絞めてやる

連れていって、くれますか……？」

数時間後、その男の家へ騎士団が到着した時には、家は荒らされ、遺伝子”が保管されていたと思われる金庫には

”同志”達から受け取った金だけが、踏み荒らされ蹴散らされ、無惨な姿で残っていた。

「機動六課？」

「ええ、そうよ。八神はやってつて知ってるでしょう？　あの子が局で新しい部隊を作るらしいのよ」

八神はやて八神はやて……。ああ、カリムとロッサのやつの妹分か。

「ロストロギア『レリック』。その探索が主な任務よ。そこに、貴方に行つてもらいたいの」

ロストロギア『レリック』。

四年前に発見され、かのジュエルシードのように複数あることが確認された、古代の遺物。

「待て、確かにやガジェットとかいう変な機械どもが群がつて来るんだろ。それに対抗しろってか？ 切つた張ったはめんどいから御免だぞ」

「いえ、貴方には事務の方にまわつてもらいたいの」

事務。事務ねえ。

俺みたいな教会騎士にも色んなタイプがいる。俺なんかの戦闘が得意な奴、カリムみたいな基本的に戦闘しない奴、シャツハミティな秘書と護衛を兼ねた奴なんかも、少し珍しいがいることにはいる。でだ、別に俺は事務も出来るが、基本は戦闘職だぞ。

「六課はね、新人が多いのよ。みんな未来のエリートって言われるくらいに優秀な人達ばかりなんだけれど、やっぱり新人は新人。少し年上で経験のある人が欲しいのよ」

「局員から出すわけにやいかねえのか？ いくらお前の妹分の隊だからって、なんでまた教会から」

いい年してあごに人差し指あてながら首を傾げるのをヤメロ。元々童顔なもんで違和感無いんだから。そのせいで騎士やら理事官やらの癖に威厳もギリギリなんだから。

「えっとね、私が後見人の一人なの。だから、教会からも一応お目付け役というか、経過確認役というか」

成る程、そこはわかつた。なら俺に白羽の矢がたつた理由は？

「貴方、嘱託資格持つてるじゃない？それでなのよ」

「そういうや持つてたな。使わんから忘れてた。ずっと更新してねえな。後で確認しつづく。」

「わかりましたよつと。いつ頃発てばいい？」

「隊舎に部屋は借りてあるから、一週間後くらいにかしい。懶な話でごめんなさい」

「別に構いやしねえよ。んじゃ、早速準備してくるわ

「ええ、お願ひね」

「それじゃサー、はやての」とよろしくね

さて、なんやかんやで一週間が過ぎ、今俺達は教会前にいるわけだが。

「いつの間にお守りまで仕事に入つてやがる」

「サー、一ですから貴方は言葉遣いに気をつけなさい」と言つてゐる
でしょ？……結局出向前までには直せませんでしたが、六課の皆
さんにご迷惑をかけないよう。忘れ物もありませんね？」

「忘れ物つてわかつてる時点で忘れ物じゃねー一つの「

「また貴方は人の揚げ足を取つて！」

いつも通りのやり取りをシャツハとしている、隣でカリムが笑つてやがる。

「なんだよ？」

「いいえ、一人とも、いつも仲がいいなと思つて」

俺はシャツハと顔を見合せた。

俺がコイツと仲がいい?『冗談、ガキの頃からの腐れ縁だろ。

「んじゃま、そろそろ行くわ。一人ともせーぜー元気でな」
「はい、いつてらっしゃい」

「くれぐれも六課の皆さんにご迷惑をかけないよう!」。そのような話が私の耳に入つたら……、ワインテルシャフトが唸りますよ

このワインジャラス修道女め。お前は本当に神職者か。

「信仰心に乏しい貴方には言われたくないですね。第一、貴方は騎士としての自覚が」

「んじゃそろそろ行くな!」

そう言い残して俺はダッシュ。
振り返つてはいけない。ワインテルシャフトがセットアップされた気配があるのだから……。

つて足はやつ!

こり、追つてくるなシャツハ!

いさな感じで、俺は仕事に行きました。（後書き）

六課行つたらシャツハさん出なくないかとこつ疑問。

「まいぶん急がせだな、今回は。じいわで帰隊長、出張だつて？ お十産よひー

大分間を開けての投稿です。お待たせして申し訳ありませんでした！

文化祭の準備に追われ、祭りが終わつたら入試準備に追われ…書きたいシーンだけ浮かんで、書く時間がなかなか…（Ｔ・Ｔ）

「すいぶん急なんだな、今回は。ついで部隊長、出張だつて？ お十産みゅー

「すみませんね、アレルさん。いつも手伝っていただいて」

「別にいいさ。ロングアーチの連中はできるやつばっかだしな。そっちが立て込んでなきや手伝いぐらいしてやるよ、シャーリー」

只今、六課の「デバイスルーム」

俺はそこで新人どもの新デバイス製作の手伝いをしている。高性能の最新型、製作費用は部隊持つてんだから羨ましい限りだぜ。実は六課に来てから事務仕事よりこっちに回されることが多い。いや、部隊長の許可あるからいいがよ。

「そろそろ訓練も本格化してきますし、なるべく早くこの子達を完成させたいんですけどねえ」

そう言ってシャーリーが眺めるのはデバイス達が浮かんでいるポット。中には四つのデバイスが入っている。

「スバルとティアナ、だつたよな。あいつらはデバイス自作だつたか」

「そーなんですよ。訓練はほぼ毎日ですし、多分ガタがくることやないかと」

朝から晩まで訓練三昧だからな。よくやるわ。

俺が昔シャツハに付き合わされた時は一日で投げ出した。一日二回午前の訓練サボつたら、毎に部屋の前に半泣きで立つてビビったわ。……今やつたらセットアップして追い回されるな。と、ビル、ここプログラム走らせてみてくれ。

「「んにちわです～。シャーリー、一緒にお皿にするですよ～」

「あ、リイン曹長～！」

「はいですぅ～！ あ、アレルさんもいたですか」

「おひ、ちつわいの。 そういうやそんな時間だな」

入って来たのは六課の空飛ぶマスクシートとコインフォース？ 空曹長。部隊長んとこの末っ子だそつだ。

「二人はデバイス達の調整ですか？」

「はい」

「そろそろ完成するです？」

「マッハキャリバーがちょっと手こずります。スバルのオリジナル魔法のウイングロード。あれをこの子からも発動できるようにしたいんですが……」

「ありや完全に先天性の魔法だからな。 術式も普通のとかなり違つてめんどういんだよ」

ちなみにビル、俺のデバイス、ワインセントに試させてるのがそのウイングロード用のプログラムだつたりする。

「でもその分、やり甲斐がある……ですよね？」

「「ん名答～！」

カツタカタとキーを叩いてたら、リインが腕を広げてデバイス達を激励し始めた。まだ目覚めちゃいないが応えてくれると、多少なりとも製作に関わってる身としちゃ嬉しいね。

どした？ つてプログラムが暴走しとる！？

「な、なに」とですかあ！？

「ウイングロードが部屋中に……つてダメー！ そっちの端末機には行かないでーー！」

ビル、キャンセルは……。

《現在バグを直していますが……三分間ほど、なんとかして下さい》

はあ、昼飯は遠そうだ……。

で、その数日後。

案の定自作組のデバイスがぶつ壊れた。ちょうどぞいんで新しいのを渡したらしい。

ん？ なんで伝聞かつて？ そりやお前、完成したから俺は事務仕事に戻つてたのよ。

でだ、デスクで書類作つてたところに、緊急アラームが鳴り響いた。ああ、ついにか……。

事務仕事のはずが、通信士資格やらがあつたせいで、いつの間に司令室入りさせられた。……カリムの差し金か？

「アレル・ロックヴェルトだ。入るぞ」

いや、カリムだな。もっと言えばシャツハもだ。嘱託資格もカードに記載された資格も奴らに言われて取つた覚えがある。

「アレルさん、 いらっしゃーー！」

「おうよ。 グリフィス、 目標は？」

目の前にモニータが展開される。 そこに映るのは、 崖壁を走るモノレール。

「このモノレールでレリックが輸送されています。 車内は無人ですが、 すでに多数のガジェットが侵入、 管制をジャックしています」

「なるほどな。 部隊長は？」

「聖王教会からこっちへ向かっていらっしゃるはずです」

カリムんとこか……。

ま、 こつちはこっちでお仕事しますか。 とりあえず席についてモニターを……。

「ん？ アルト、 広域スキヤン！ 空になんか影が横切ったぞ！」

「はいっ！ …… ガジェット反応、 空からです！」

「航空型、 現地観測隊を補足！」

オイオイ新型か！？

つかマズイな。 先になんとかしなきゃ へりがやばいぞ。

『 いらっしゃフロイト。 グリフィス、 パーキングに車止めて向かうから、 飛行許可お願ひ』

「了解。 市街地個人飛行、 承認します！」

アレルさん、 高町空尉の方にも」

「あいよ。 …… 聞こえてたか？ 高町空尉、 そっちも先行して航空型に対処を。 ヴァイス、 こっちから送るルートに沿ってくれ」

『 わかりました！』

『了解でさあ！』

齋

「スター・ズ01、ライトニング01、制空権獲得」「ガジェット？型、散開開始！追撃サポートに入ります！」

キーボードを叩いて？型の編隊をロック。それらに追尾設定を掛けたうえで隊長らに送る。

つたく、四方八方から湧いてきやがるな！コイツらは！

そんなこんなで今回のオチ。

結局たいしたトラブルもなく任務完了。アンノウンが出たが部隊長の知り合いらしい。

らしこつつか、俺の知り合い、サーレ・ローラルバーグ・ナカジマだ。

なに、あいつも来んの？知り合いだらけだな、この部隊。

で。

あの任務から数日後。ロストロギア反応が出たとかで部隊長をはじめとしたフォワード陣が管理外世界の97番だかに出張。

教会の方からの依頼らしい。

その間大部分のロングアーチは隊舎で待機。出張中にガジェットが
出たらどうすんだ……？

「それで？お前さんは居残りで六課の警護か？」

「つむ。これから皆が出払つ場合も私はここを守ることになるだろ
う」「

「『盾の守護獣』だしな、適役つちや適役か。しかも狼形態だと人
材制限にも引っ掛けならないと。リミッターほどじゃないがお前も裏
技だよな」

「うお、銀取られた。

んじゃここに角打つて成る、と。パチリ。

「我々は主の保有戦力扱いであったからな、そこを突いて我らだけ
制限から抜け出そうとも考えたのだが……」「

「流石にそりや無茶過ぎるだろ……」

「こいつの櫓、崩せねえなあ……。しかしに關しても流石は守護獣だ
よ、オイ。パチリ。

「つむ。しかしそく将棋など知っていたな。ミッドチルダにこぐら
地球の、特に日本の文化が普及しているとはいえ異界の伝統遊技な
ど競技人口も少ないだろ?」「

なんでも第97管理外世界、『地球』からの次元漂流者が昔から多
かったらしい。そういう奴らから向こうの文化が入ってきたわけだ。
向こうじや次元漂流は神隠しとか言われてるらしい。たまに家畜も
流れてくるが、そつそつキャトルキュー・ミーニングだつたか?
パチリ。

「はやてが教会に来たとき土産に持つてきただよ。騎士団の指揮
官クラスは皆やつてるぜ?」

たしかチエスとかいうのも持ってきてたな。たまに将棋 v s チエスなんてのもやる。これもはやての案だったんだが、そういうのは

「ワヨーセツチュー、とか言つたか?」

「むしろ異種格闘技戦、といった感じではあるな。……アレル、王手だ」

「なにい!? ま、待つたは……?」

「すでに三回、使つていいだろう」

「うつ……。ごめんなさい、参りました」

ただいま午前十時。このままなにもなしに、部隊長たちが帰つくるとうれしいんだがなあ。

「あじふん急がせだな、今回は。ヒカルが帰郷、出張だつて、お十種めぐ

！」を読んでこないとひどい、今回の話を読んでいただいたといひことで。

お気づきだとは思いますが、この「裏・機動六課～ロングアーチ業務録～」は「魔法少女リリカルなのは」セリフ～～～疊り空と優しい電～の外伝的な物になっています。

といひか、します。しました。してしまつた！

基本的に本編の話と話の間の出来事や、本編の裏側などを書いていこうと思います。

とか書いて本編より時間進んでるんですけどね！
「つづに追いつかぬよひ、本編の方も頑張ります…。

ではでは、御意見・御感想など、お待ちしております。煤払でした。

え？ シャツハさんが出でない？

次回です、次回！～

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9418m/>

裏・機動六課～ロングアーチ業務録～

2010年10月13日05時50分発行